公共空間にみる女性表現
－明治・大正期の公園を手がかりに－

○小坂美保（早稲田大学スポーツ科学学術院）

キーワード：公共空間，女性表現，公園

「スタバ」の似合う場所

「スタバ女」．これは，平成14（2002）年上半期の芥川賞を受賞した吉田修一の『パーク・ライフ』［吉田，2002］で主人公〈ぼく〉と恋が始まりかける女性の名称である．彼女は，「あの女」から「スターバックスのコーヒーを飲む女」，ついで「スタバ女」と〈ぼく〉の職場の先輩に命名された．その名の通り，彼女は，スターバックスのコーヒーを飲んでいるのだが，スタバの店内ではなく，日比谷公園でそのコーヒーを飲むのが日課なのである．しかし，彼女は，なぜ「スタバ女」という名称でなければならなかったのだろうか．この点に関して，「スタバ女」自身が次のように話す場面がある．

「…，あの店に座ってコーヒーなんかを飲んでると，次から次に女性客が入ってくるでしょ？それがぜんぶ私に見えるの．一種の自己嫌悪ね」

「…，たぶんみんなスターバックスの味が判るようになった女たちなのよね」［吉田，2002：31］

「スタバ女」は，スタバの味が判るようになった女たちの一人でありながら，その一員でないために日比谷公園でコーヒーを飲むのではないか．同じコーヒーを飲むという行為でも，場所あるいは空間の違いによって，その描かれ方が異なってくる．

本研究の視点

本研究は，スタバと女性に関して論じるものではない．ここで問題にしたいのは，女性と場所（空間）の描かれ方である．現在では，女性が一人で店に入ったり，街中をぶらぶらしたり，公園を一人で散歩する姿は当たり前かもしれない．しかし，このような女性の行動形態については，大正時代にみられた「銀ブラ」や「モガ」の存在があり，これらを契機に多くの変化があったことはこれまでの研究において明らかにされている．ここで，少し視点を変えてみたい．というのは，「銀ブラ」や「モガ」が生まれる以前，女性がどのように振舞っていたのか疑問である．加えて，「銀ブラ」や「モガ」がそれ以前の女性との連続性がどのようなものであっただろうか．このような疑問から，「どんなささいな事柄にも階級と性別の差異の線引きを行うのが，明治・大正という時代」［石原，2007：29］に女性と都市との関係がどのようなものであったのかを，公園という空間に焦点をあててみていきたい．

たとえば，島崎藤村が明治40（1907）年に発表した『並木』には，日比谷公園内の様子が次のように描かれている．

「美しい洋傘をさした人々は幾群れか二人のわきを通り過ぎた．昔のように内輪に歩いている娘は一人もいない．いずれも親泣かせといったような連中が，互いに当世の流行を競い合っての風俗は，はでで，ほしいままで，絵のようにも見える．色も，好みも，みな変わった．中には男にしなやかな手を預け，横からささやかせ，軽く笑いながら木陰を行くものもあった．妻とすらいっしょに歩いたことのない原は，この大胆なふるまいに怖気を震って，時々立ちどまっては嘆息した．『これが首を延ばして待ちこがれていた，新しい時代というものであろうか．』こう原は心に驚いたのである．」［島崎，1907：18］

主人公の旧友である「原」は，8年振りに上京し，変わりゆく東京の姿や女性の振る舞いの変化を「驚くべき事実」として目の当たりにしている．ここで注目したいのは，女性に関する記述である．「洋傘をさす」や「内輪では歩かない娘」，「男に寄りかかりながら歩く女性」という行為は，都市あるいは空間の変化によって現れてきたとみることもできる．

本研究の目的

そこで本研究では，都市にあらわれた「公園」という「公共空間」にみられる女性表現にどのような特徴があるのかを明らかにすることを目的とする．具体的には，明治初期から整備され，明治36（1903）年に一つの近代都市施設としての「公園」を具現化した「日比谷公園」をターニングポイントとしながら，日本近代における公園の考察を通して，公園空間に描かれたあるいは表現された「女性」の姿を詳細に検討していく．

【引用文献】

石原千秋（2007）『百年前の私たち　雑書から見る男と女』，講談社現代新書
島崎藤村（1907）『並木』，新潮社
吉田修一（2002）『パーク・ライフ』，文藝春秋